

「つたら、いけないだろ」

母ちゃんが、声を押し殺して言った。

オレは、母ちゃんの解説に声も出なかった。

「ほら、お父さんに謝って、ご飯をお食べ」

その時初めて、父ちゃんが口を開いた。

「行儀の悪いやつは、飯など食わんでいい」

オレの晩御飯は、その言葉で唐突に終わってしまった。

味噌汁のせいではなく、鼻がツーンと痛くなったが、必死で涙をこらえた。

「アキラ、かぶった味噌汁で、顔がかゆくなっちゃうから、お風呂に入っておいで」

ばあちゃんがオロオロとそう言って、オレの背中をやさしく叩いた。

オレは黙って脱衣場に行き、乱暴に服を脱いだが、また父ちゃんに叱られることを恐れて、脱いだ服はたたんで脱衣かごに入れた。風呂場のドアを乱暴に開けて入った。洗い場で何度も顔を洗い、湯船につかった。

——クソバカおやじ！

声に出すのは恐ろしかったので、心の中で何度も叫んだ。

父ちゃんは、いつも口より先に手が出る。というより手が出たあと、なんで殴ったかさえ言ってくれないので、殴

られた後に理由を自分で考えなくちゃならない。

——バカヤローが。殴るより先に、口で注意すればいいじ

ゃんか。

本当に父ちゃんには、頭にくる。オレの友達の父親は、サラリーマンや自営業が多いけど、遊びに行くとき親はみんな優しいし、オレ達子どもと、よくしゃべる。

——フツの父親は、こんなに子どもを殴らないよな。父ちゃんが無口なのは、お客さんを相手にしない農家だからだろうか。くそ、大人になって、父ちゃんに威張られながら農業やるなんて、ゼツタイにいやだ。オレはまだ四年生だけど、オレが大人になって父ちゃんがジジイになったら、田んぼを売り払ってやる。そして父ちゃんが泣いたら笑ってやる！

自分の顔に、残酷な笑みが浮かぶのが分かった。風呂のお湯でもう一度顔を洗って、自分に言い聞かせた。

——オレはゼツタイ、父ちゃんのような大人にはならない。自分の子どもにも暴力を振るうようなことはしない。優しい大人になるんだ！

☆

「おい、ヒロト。助手席で寝るなって、いつも言っているだろ！」

父さんのきびしい声に、ぼくはハッと目が覚めた。

「あっ、ごめんさい」

「助手席に座っている人が眠ると、ドライバーも眠くなる。助手席に座ったら、眠くても我慢するのが、マナーだぞ」